

子どもたちの創造力を主役に

今川和佳子 アートコーディネーター

「本」というのは、私たちの暮らしの中にもあまりにも当たり前存在している。故に「本と人」との距離感や関係性は、一度決まってしまうと、本来変えるのが難しいように思う。でも、それらをいともあっさり取り払ってしまうのが、八戸ブックセンターだ。

例えば本を買うとき。大概は買いたいものが決まっていて、目的を持って本屋へ行くことが多かった私。でもブックセンターは、本を買うつもりはなくふらりと立ち寄りだけなのに、思いがけないジャンルの本を手にとってレジに並んでしまう。それもそのはず、ブックセンターの選書は「売れ筋ではない良書」ということだから領ける。自分でも気付いていない、好奇心の隙間をくすぐられるような心地よさがある。

もう一つ感激したのが、本を読むことを推奨するだけでなく、「本を書く人を育てる」というコンセプト。執筆に専念できる小部屋「カンヅメブース」は、私も何度か利用したことがあるが、本や書くことが好きな大人にとって、自分だけの時間に没頭できる隠れ家的な場所で、時の経つのを忘れてしまう。

翻って、今から1年ほど前、ある中学校の総合学習の授業で、八戸の文化施設や活動のことを話す機会に恵まれた。かつて自分自身も勤めていた「はっち」を含め、「マチニワ」や「ブックセンター」がどのような目的で作られ、どのように使うことができるのかを紹介した。するとブックセンターのことを知っている生徒はごくわずかだった一方で、前述のようなブックセンターの特徴に高い関心を示す生徒が多く、その反応を嬉しく思った。「自分は文章を書くことが好きで、将来小説家になりたいので、一度行ってみたい」と感想を寄せてくれた子もいた。ブックセンターに限らず、地域の子どもたちが、自分の好奇心や夢にまっすぐ向かえるような、そんな場作りや情報発信をしなければならぬ、と自分ごとのように思い、同時にその可能性の大きさを直感した瞬間だった。

例えば、中高生や大学生を対象に、小説、絵本など、「書くこと、描くこと」に興味のある生徒たちの作品を募集し、展示する。作品を作るところから、最後に展示するまでのプロセスに、作家やアーティストが参加してアドバイスをしたり、展示そのものを生徒たちがキュレーションすることも、かけがえのない経験になるだろう。彼らからどんなプランが飛び出すか、想像しただけでワクワクしますね。

また生徒が、書棚の一角の選書をプロデュースするような企画も、さまざまな展開が期待できるだろう。例えばブックセンターのスタッフによる「良い本とは?」「セレクトするときの視点」などレクチャー

は、刺激のかつ唯一無二のものになるだろう。

いずれも、「大人から子供へ」「プロから受け手へ」の一方向的なものではなくて、本を通じて参加する子供たちの創造力を主役にできたなら、地域の本屋、また文化や教育の拠点として、ブックセンターはますますその光を放つことだろう。

今川和佳子 wakako imagawa

アートコーディネーター

「1冊の本から見えるオランダの世界
～色、デザイン、建築～」(2018)

1976年八戸市出身。合同会社imajimu代表。2008～2014年まで八戸ポータルミュージアムはっちの初代コーディネーターを務め、現在も市や商店街との協働プロジェクトや企業メセナ、商品企画開発など、アートと地域をつなぐ活動をしている。

